



堀内成子 総編集
本体 3000 円＋税
B 5 判／南江堂／2015 年

評者

江藤宏美 長崎大学大学院医歯薬学総合
研究科教授

エビデンスで意思決定を支援し よりよい実践につなげる

目次には、日頃、妊婦や産婦からよく質問される疑問が並んでいる。それらの疑問に丁寧に応えようとしたものが本書である。

疑問の 1 つひとつを見ていくと、第 1 章の「くすりに関する質問」では、エビデンスの強さは示されていないが、薬や予防接種に関するさまざまな質問に答えられるように実際の薬剤名が挙げられ、妊娠の時期ごとに母子にどのような影響があるか解説されている。関連して巻末の薬剤資料が圧巻で、さらに詳細な情報が掲載されているほか、自分でウェブサイトアクセスして情報を得られるようになっている。

第 2 章以降は、疑問に対する答えが「Answer」として、エビデンスの強さとともに記載されてい

る。答えの根拠として多く使用されているのは、最新のコクランシステマティックレビューの信頼される文献であり、また吟味されたランダム化比較試験である。対象者がどのような妊婦あるいは産婦で、結果がどのくらいだったのかを具体的に数値で示しており、研究の概要が明確に理解できる。

本書にはいろいろな使い方があるだろう。まず【実践】では、これらのエビデンスを使用して、直接、妊婦や産婦の疑問に答えていく場面が多くあるだろう。また、日々のケアのなかで埋もれている「このケアは本当に効果があるか」という臨床家としての疑問に気づかせてくれるかもしれない。そして、その時に、現在行なわれている実践を変えようとする後押しをしてくれることにもなるだろう。

【教育】では、助産学生あるいは看護学生に、本書を基に現在のケアの根拠を示すことができる。本書の「統計関連用語の解説一覧」がたいへん親切にエビデンスをナビゲートしてくれる。

【研究】では、エビデンスが少ない、あるいは今後の研究が待たれる項目がたくさんあることがわかる。さらにどのような臨床研究を積み上げる必要があるか、研究のシーズを探すのに本書は役立つ。

専門職であるわれわれが肝に銘じておくべきことは、エビデンスは独り歩きするものではなく、われわれの「専門的技能」と、対象となる妊婦や産婦の「価値観」と、この「エビデンス」の 3 つが重なった部分で実践が展開される必要があるということである¹⁾。これが根拠に基づいた医療 (EBM) なのである。常に対象者を中心に考え、情報を賢く選択し、意思決定を支援していく。研究と実践をつなぐ本書がそうしたよりよい実践につながっていくように、周産期にかかわるすべての人にお勧めしたい 1 冊である。

①

【参考文献】

- 1) Sackett DL, Straus SE, Richardson WS, Rosenberg W, Haynes RB: Evidence-Based Medicine: How to Practice and Teach EBM 2nd edition. Churchill-Livingstone, 2010.